

検証番組「障害者の戦争」を見て

先の太平洋戦争中、戦局に動員され、一方排除された障害者はどう過ごしたのか、どう戦争と関わったのかの視点から、新たに見つかった資料と体験者の証言で構成された検証番組「障害者の戦争」を見た。

その内容の概略は、次のようなものであった。

戦局が厳しくなるにつれ、国は障害者を軍属、あるいは工場労働者として動員に踏み切っていた。

視覚障害者は、敵機を見分ける夜間の「防空監視員」として、パイロットの身体をほぐす「技療手」として、軍需工場の労働者として、また、聴覚障害者も工場労働者として動員された。

新たに見つかった資料には、「防空監視員」として訓練するためのレコード（爆音で敵機を判別）も。

徴兵制度で軍人になれないと「非国民」と云われた世相の中で、差別され疎外感のあった障害者自身も「国の役に立ちたい」と、視覚障害者団体は、政府、軍に協力の「嘆願書」を出し、戦地に赴いて戻らぬ人も。

当時、ろう学校等は義務教育対象外で各種学校扱いであったが、聴覚障害の子どもも「国の役に立とう」との学校側の意図の下に工場労働に動員された。

国は傷痍軍人を放置すると戦争に対する国民の士気を削ぐことになると、傷痍軍人の支援を迫られる。

国の傷痍軍人への支援は自分たちの支援のチャンスになるのではないかと考えた視覚障害者団体は、視覚障害の傷痍軍人の社会復帰のための訓練と自分たちの社会参加の訓練の共有の訓練所として建物を寄贈し団体名も共有の名称に変えた。

しかし、実際には、例えば視覚障害の傷痍軍人には点字付きの懐中時計や白杖は支給されても生まれながらの視覚障害の自分たちには支給されないというような差別は相変わらずで、団体の願いは挫折。

番組では、視覚障害者、聴覚障害者が主であったが、精神障害者についても僅かに触れられていた。

精神障害者は隔離政策で病院に収容されていたが、終戦間近の数年は食料の配給もままならず、栄養失調等での死亡率が40%だったとの資料も。

番組を見終わって日にちが経つが、障害者と戦争の問題から何をどう学ぶべきか、考えなくてはならない側面が余りにも多くて未だ整理しかねている。

もし番組を見た方がいましたら、ご意見をお聞かせ下さい。